

社会変革と技術経営

「読み・書き・パソコン」の時代の幕開け

— IT 活用で後進国 —

専務理事 小平 和一郎

新型コロナウイルス感染拡大対策で、日本のIT（情報技術）活用の遅れが顕著になる。海外の対応をみて、日本のイノベーション後進国に気付く。

海外では、学校閉鎖をしてもオンライン授業で対応していて、休校はしていないと伝えられた。日本の学校の多くが、対応出来ていない。

企業の多くは、いち早くテレワークでの在宅勤務に切り替えた。都心に高い家賃の事務所をもつ必要がなくなるとともに通勤時間の削減と交通費の削減ができることに気付く。

多様な働き方が生まれ、時間で管理する労働形態の見直しが進む。社内データベースへのアクセスを許容するとともに不正アクセスを監視する体制が構築された。決裁処理、紙への押印が残っている限り、効率の悪いアナログ処理が残るので、可能な範囲での改善が進む。請求書の電子化や領収書の発行をやめるなどの合理化が進む。

電子政府に取り組んできた政府にも問題が起きた。一人10万円の給付金のオンライン申請で混乱を生じ、受付を停止した自治体が出た。政府が取り組むシステム開発では、開発の丸投げと共に多重下請けを行っており国会でも問題になった。マイナンバーが記載されている住民基本台帳を使っただけの処理に、デジタルデータでの処理ができず紙に打ち出して確認する昔ながらのアナログ処理で行ったといわれる。システム開発を外部に丸投げしているとともに、下請けが更なる下請けへ発注する多重下請け構造になって作業すると聞くと、マイナンバーに紐づいた個人情報、流失していないか心配する。

IT基礎教育への期待

日本の国の取り組みはどうあるべきか。まずは、小学校、中学校、高等学校の生徒に一台、パソコンを配布する。教科書は電子書籍とする。ノートの電子化を推進する。参考図書などへのアクセスも可能とする。

モノづくりとコトづくりの融合で世界の「つくり」をリードする取り組みを考える。昔から「読み・書き・そろばん」といわれたが、今や「読み・書き・パソコン」である。コンピュータの扱いは、パソコンを使い始めれば容易に学べる。

次に、モノづくり、コトづくりを融合した「つくり」の基礎教育に取り組む。コンピュータの基礎的な知識やプログラミングを小学校あたりから学ぶと良い。ソフトウェアを作る基礎知識を早くから学ぶ。

日本人の強みとしたい「つくり」の基礎力を身に付けることで、つくりのデザイン力や創生力が育まれる。